

SNS と少年について

國學院大學法学部 4 年 松木彩夏

- 1 はじめに
- 2 インターネットの利用状況
- 3 SNS を介した問題・トラブル
- 4 子どもに与える影響
- 5 SNS 依存に陥る原因
- 6 安心安全に利用できるようにするには
- 7 おわりに

1 はじめに

昨今ニュースで子どもの SNS 依存やインターネット利用時間が過去最高であること、SNS を利用したトラブルや犯罪に巻き込まれるなど、SNS を介した問題を多く見ている。こうした中で、今の社会を見渡してみるとスマートフォン所持の低年齢化が進んでいると感じた。SNS 依存は子どもの成長に、より影響してしまう。また、子どもの社会問題には SNS が大きく関係していると思ったことから、SNS と少年に関する問題について早急に対策すべきであり、SNS と少年について取り上げたいと考えた。

2 インターネットの利用状況

総務省が令和 5 年にとった年齢階層別インターネット利用率¹をみると、6～12 歳は 86.2%、13～19 歳は 98.1%がインターネットを利用していることが分かる。また、平成 30 年の属性別

¹[総務省 | 令和 5 年版 情報通信白書 | インターネット \(soumu.go.jp\) \(2024 年 1 月 8 日閲覧\)](https://www.soumu.go.jp)

インターネット利用率²では、6～12歳は73.6%、13～19歳は96.9%がインターネットを利用していた。これらのことから、5年間で6～12歳が10%以上増えており、明らかにインターネット利用の低年齢化が進んでいると分かる。

また、内閣府の青少年のインターネットの利用状況³から、スマートフォンの利用率は青少年の総数で73.4%であり、小学生（10歳以上）は42.8%、中学生は78.1%、高校生は96.9%である。ほとんどの子どもが何らかの機器でインターネットを利用しており、インターネットに繋がる環境にあることが分かる。また、スマートフォンは簡単に様々なサイトにアクセスでき、親の目も届きにくいいため、トラブルや問題に発展しやすい。

3 SNSを介した問題・トラブル

総務省の調査⁴で、SNS利用において「通知などが気になってよく見てしまう」ことが日本、アメリカ、イギリス、フランス、韓国、シンガポールの6か国共通で高いことが分かった。そのため、SNSは依存傾向に陥りやすいものでもあり、問題やトラブルが多く発生している。

まず、SNS依存になることで起きる問題は、運動不足、学業や仕事への支障、コミュニケーション不足、不眠、抑うつ状態、食生活が不安定、といったことが大きく挙げられる。

トラブルでは、文面での会話になると誤解を生みやすいこともあり、友人間でいじめや仲間外れにされるといったことがある。また、実際起きた事件として、座間9人殺害事件ではSNSから悲惨な事件に発展してしまったということが起きている。

² 総務省 | 平成30年版 情報通信白書 | インターネットの利用状況 (soumu.go.jp) (2024年1月8日閲覧)

³ 資料2 令和4年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果 (概要) (cfa.go.jp) (2024年1月14日閲覧)

⁴ 総務省 | 平成26年版 情報通信白書 | ネット依存傾向の国際比較 (soumu.go.jp) (2024年1月14日閲覧)

大人でも問題やトラブルに発展することから、子どもはより注意して SNS を使うべきであるといえる。

4 子どもに与える影響

文部科学省の資料から子どもに与える影響は以下の通りである。⁵

体力低下、運動不足、骨密度低下などの身体的問題、睡眠障害、引きこもり、意欲低下などの精神的問題、遅刻、欠席、成績低下などの学業上問題、家庭内の暴言、暴力などの家族問題がある。

まず、身体的問題は座ったままや寝転がりながら使用することで運動しない状態が長時間続く。特に、昔の子どもの場合、放課後公園などで運動することが多かったが、今では家でスマートフォンを利用して友人間で会話ができる。そのため、わざわざ外出して友達と会話をしなくても家でできるためちょっとした運動というものも減っていると考えられる。精神的問題は、親の目が届きにくい夜に過剰利用してしまうと睡眠に影響が出やすくなってしまふ。十分な睡眠をとらないことで翌日の意欲にも繋がり、意欲低下といった影響が出る。学業上問題は、スマートフォンには子どもの興味をそそるものがたくさん詰まっております、アクセスもしやすいため勉強の弊害になってしまふ。また、精神的問題の睡眠障害から朝起きるのが辛くなってしまふ、遅刻欠席の学業上問題にも繋がる。家庭問題は、過剰使用を親に注意されることで暴言暴力に発展してしまふと考える。これらの問題が子どものころから起こってしまふと、将来に悪影響を及ぼすため早めの対策が必要である。

⁵ [「青少年教育施設を活用したネット依存対策推進事業」実施運営マニュアル事例集 \(mext.go.jp\) \(2024年1月14日閲覧\)](#)

5 SNS 依存に陥る原因

依存に陥る原因は、本人によるものと環境によるものがある。⁶本人によるものは「対人関係が築けないこと」とされている。環境によるものは「自分の居場所がない」、「ネット利用の放任」、「子どもを甘やかす家庭」、「父性が欠如した家庭」とされている。

「対人関係が築けないこと」について、今現在 SNS で他人とコミュニケーションが図ることはとても容易である。そのため、他人との関わりをリアルの中で築かなくてもよく、その欲を SNS 上でも果たせるようになったことが依存に陥ってしまうと考える。また、コミュニケーションを取ることが苦手な人は、学校などでの友達作りも苦手になってしまい、SNS で繋がりを求めてしまうようになる。こうしたことから、対人関係が苦手な人はより苦手になっていってしまい築くことが困難になると考える。「自分の居場所がない」について、学校や家庭において居場所のない子どもたちが、SNS 上のコミュニティで自身の居場所を確立していると考えられる。

「ネット利用の放任」、「子どもを甘やかす家庭」、「父性が欠如した家庭」について家庭環境が大きい。家庭内でネットの利用時間などのルール作りがされていない場合において、過剰使用の抑制が自身でできず依存傾向に陥っていくと考える。SNS には、子どもの興味をそそるものがたくさんある中で、過剰使用には周囲の注意やひと声が必要である。

6 安心安全に利用できるようにするには

インターネット社会になっている中で、子どもに対して SNS を一切使用させないことは難しい。そのため、安心安全に利用できるようどうして行くべきかについて、以上で紹介した SNS

⁶ 樋口進『心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るのか（ミネルヴァ書房、2017、51頁）』

依存に陥る原因を一つ一つ解決していくことが大切である。しかし、環境によるものにおいては、家庭ではそれぞれの教育があるため、少し難しい部分がある。そのため、自治体や学校も協力していくことが必要である。そのため、家庭、学校、自治体でそれぞれができることを考えたい。

まず、家庭ではコミュニケーションをたくさんとるべきである。コミュニケーションを取ることで、子どもの悩みに早く気付くことができる。子どもの悩み解決に尽力してあげること
で、悩みや不安などから SNS が逃げ場となってしまうことを防ぎ、近くの人々にすぐに相談できるようになると考える。他にも、家庭では積極的にスマートフォン利用のルール作りをしていくことが重要である。子ども自身で過剰使用を抑制することは難しいため、時間のルールや親の管理の下 SNS を使用するといったことができるとうい。

次に、学校では交通安全教室のような SNS 使用やスマートフォン使用などについて危険を教え、知ってもらう機会を作ることが大切である。小さなころから、スマートフォンは身近にあるため、危険性を十分理解できていない子どもは多いだろう。そのため、危険性を知ってもらうような機会を定期的に作るべきである。また、神奈川県では危険を疑似体験できるサイト⁷を作っており、こうしたものの活用をしていくことも大切である。他にも、子どもだけでなく親にもこういった危険を知ってもらうことはとても重要であるため、保護者会や PTA などを活用して説明を設ける機会をも行っていくべきである。

最後に、自治体では、第三の居場所づくりをしていくべきである。家庭や学校が子どもにとって、必ずしも安心できる場所とは限らないため、自治体が居場所を設けることで安心安全な

⁷ [疑似体験教材_インターネットトラブル未然防止教材 \(pref.kanagawa.jp\)](http://pref.kanagawa.jp) (2024 年 1 月 18 日閲覧)

居場所を新たに確立できると考える。例えば、子ども食堂や空き家を活用した居場所などを積極的に作っていくことで第三の居場所づくりができる。そして、東京都が行っている、「SNS 東京ルール」⁸のようなことも行うことは重要である。国や都道府県、市町村がこういったルールを発信することで、危険意識を持ってもらえ、全体に周知できるため大切である。

7 おわりに

インターネット社会になっている中で、「危険が潜んでいるから」といったことを理由にして SNS などを完全に使用させないことは不可能である。なぜなら、今後もっとインターネット社会になっていき、必要性というものも高まっていくからである。そのため、しっかりと周囲の大人が子どもを気にかけて、依存に陥らないよう対策していくべきである。また、SNS 依存に陥ってしまうと今後身体的や精神的になど辛くなってしまい、子どもの成長を阻害してしまう可能性がある。そのため、十分すぎるくらいの支援をそれぞれの大人が行っていくことが大切である。

⁸ [107j.pdf \(tokyo.lg.jp\)](https://www.tokyo.lg.jp/107j.pdf) (2024 年 1 月 18 日閲覧)